

## 資料

## 性役割特性語の意味構造

——性役割測定尺度(ISRS)作成の試み——

伊藤裕子\*

FACTOR STRUCTURE OF SEX-ROLE CHARACTERISTICS  
AND ITS RELATION TO AGENCY AND COMMUNION.

Yuko ITO

The purpose of this study was to examine (a) the concepts of masculinity and femininity, and their interrelation, (b) the appropriateness of the scale for measurements of sex-roles, and (c) the difference of role expectations for both sexes. Using two types of adjective lists, scores concerning desirabilities for men, women, and 'self' were factor analyzed respectively in unipolar scales among 155 undergraduates and in bipolar (SD) scales also among 217 undergraduates. In both scales, three factors were identified; "agency" emphasizing personal abilities or properties, "communion" oriented to cooperation with-or consideration for others, and "delicacy-charms" consisting of tenderness and sexual attractiveness. The scale was termed ISRS (Ito Sex Role Scale). Agency and communion were the main structural dimensions of sex-roles, mutually related with desirability for both men and women. The unipolar scales were more suitable for measurements of sex-roles than SD scales for the independence of factors. Role expectations for men consisted of agency and communion, while delicacy-charms were added to those for women. Reliability and validity of ISRS were substantiated in various aspects.

Key words; sex roles, masculinity and femininity, role expectations, structural dimensions, college students.

男性性、女性性が各々男女に固有の属性ではなく、一人の人間の中にある2つの心理・行動傾向として測定され、記述されるべきものとして、70年代以降、種々のアンドロジニー・スケールが考案された。その中で、両者が対極をなす次元の関係ではなく、二次元の関係にあることは、既に Bem (1974)、Spence ら (1975) によって実証されている。しかし、これらはその尺度作成にあたって、性差のみられた項目を尺度項目とするのみで、項目間の関係や次元性が十分検討されていない。その後、Gaudreau (1977) や Gross ら (1979) によって尺度の妥当性の検討が因子分析を用いてなされたが、男性性尺度、

女性性尺度の独立性が因子構造からは保証されえなかったり (Spence らの PAQ)、独立性は保証されたが両因子に負荷しない不適切な項目が存在する (Bem の BSRI) など尺度構成上に問題が残る。

また、これまで用いられてきた男性性、女性性という記述的・包括的概念が、若林ら (1981) も指摘するように、何を意味するのかは必ずしも明らかとは言えない。例えば、男女の役割形態からみた Parsons ら (1955) の instrumental (道具的)、expressive (表出的) や、生活形態における人間の基本的存在様式を記述した Bakan (1966) の agency (作動性)、communion (共同性) などが、男性性、女性性の概念内容とどのような対応関係にあるかが明確にされる必要がある。

\* PL学園女子短期大学 (PL Gakuen Women's Junior College)

そこで本研究では第1に、これまで男性性、女性性として一括して扱われてきた概念の内容を因子分析を用いて検討し、これらの記述様式とどのように対応するかを明らかにする。

第2に、性役割意味次元の関係を解明する。男性性、女性性を一次元連続体と仮定する旧来の性度スケールへの反証と、アンドロジニー・タイプ析出の意図から、両者は相互に独立(直交)な二次元構造を成すとして作成されたアンドロジニー・スケールだが(Bem, 1974; Spenceら, 1975; 若林ら, 1981; 他)、いずれの場合も両者には、少なくとも負ではないが弱い有意な正の相関がみられた。これらの結果は尺度構成上の不備に由来するのか、両者の関係に潜在的に内在するものなのかを尺度の項目内容から再度検討する必要がある。

第3に、性役割の測定には単極尺度と双極尺度のどちらがより適切かを検討する。否定的特性は一般に概念の収斂度が低く(伊藤, 1983)、尺度項目として使われることは少ないが、Kellyら(1977)も主張するように、負の価値を有する望ましくない特性が性役割意味構造の上でどのような機能を果たし、位置を占めるかは興味ある問題である。そこで本研究では否定的特性を含む項目群を単極尺度、双極尺度別に分析し、その結果を比較検討する。

以上の目的に加え、性役割測定尺度を作成するための信頼性、妥当性の検討を行い、性役割期待の認知および性役割観から、男女における性役割の意味構造の差異を検証する。

## 方 法

### 尺度項目の選定

本調査で用いる尺度項目を選定するために予め次の調査が行われた(伊藤, 1983)。まず、男性および女性を記述する特性のアイテム・プールを作成するため、「望ましい(望ましくない)男性像(女性像)」および「男らしさ(女らしさ)の肯定的(否定的)側面」について特徴を自由記述させ、大学生男女207名から特性語を収集した。次に、得られた回答(反応語延べ数: 肯定的特性1896語、否定的特性1561語)を分類・整理し、出現頻度3以上の肯定的特性81語、否定的特性100語について、その特性が男女どちらに多くみられるかを大学生男女および短大生女子計454名に判定させ、各特性のステレオタイプな性の帰属を明らかにした。

以上の手続を経た特性語の中から、①身体的特徴を表わしている語は除く、②特殊な表現は避ける、③意味の重複を避ける、④出現頻度の高い語を採用(反対語はその

限りではない)、⑤男女を包括的に記述しうるよう特性語の性の分類の帰属にはこだわらない\*の選択基準で、肯定的特性39、否定的特性49の計88語を選定し、単極尺度の調査項目とした。

双極尺度の調査項目は、単極尺度による項目間の相関マトリックスを基に、まず対を成す特性の組み合わせを作り、次に対を成す特性の積率相関係数(負の値の大きさ)によってその対極性を確認した。複数の組み合わせが考えられる場合には負の相関の高い対を選択した。その結果、33対66特性が選択されたが、対を成さない残り22特性のうち、当該因子への因子負荷量が高く、性役割を記述する上で欠かせないと考えられる4特性を、それぞれ妥当と思われる反対語を添えて調査項目に加え、37対74特性を双極尺度の調査項目とした。手続の詳細は伊藤(1985)を参照。

評定は、一般に持たれている性役割期待と個人の性役割観とが性役割意味次元において異なるか否かをみるため、次の3つの評価概念について行われた。単極尺度、双極尺度とも項目をランダムに配し、「一般に男性にとって: 男性役割期待」、「一般に女性にとって: 女性役割期待」、「あなた自身にとって: 個人的評価」の3評価概念について独立に、各特性を「非常に望ましい」～「非常に望ましくない」の7段階で被調査者に評定させた。

### 調査の実施

単極尺度による調査は1984年10月に行われ、被調査者は大学1・2年生男女155名(男子84名、女子71名)であった。双極尺度による調査は1984年11月～1985年1月に行われ、被調査者は大学1年生男女217名(男子97名、女子120名)であった。その際、尺度の併存的妥当性を検討するため、性役割観測定尺度MHFスケール(伊藤, 1978)を併せて実施した。以上の調査は全て集団法で行われた。

なお、前記2度の調査と今記2度の調査は全て異なった大学の対象者からとられている。

## 結果と考察

### 1. 因子分析

88特性から成る単極尺度の調査結果について、各評価概念ごとに主因子解を求め、固有値1.0以上の因子についてバリマックス回転を行った。項目数が多かったため、各因子の全分散への寄与率は全般に低いが、相対累積寄与率の増分の減少を打ち切りの基準に因子を採択し、内容を検討した。その結果、因子構造が斉合的で明確な意味

\* 特性語の性の帰属は、後に尺度項目の妥当性を検討する際に用いる。

TABLE 1 単極尺度による男性役割期待, 女性役割期待, 個人的評価の因子分析結果

項目	男性役割期待				女性役割期待				個人的評価			
	第I因子 作動性	第II因子 共同性	第III因子 美・繊細	共通性 (h <sup>2</sup> )	第I因子 作動性	第II因子 共同性	第III因子 美・繊細	共通性 (h <sup>2</sup> )	第I因子 作動性	第II因子 共同性	第III因子 美・繊細	共通性 (h <sup>2</sup> )
・行動力のある	.72	.29	.00	.60	.72	.12	-.01	.53	.82	.06	.01	.68
・積極的な	.55	.14	.07	.33	.58	.15	.06	.36	.61	.00	.11	.38
・意志の強い	.66	.14	.01	.46	.75	.12	-.16	.60	.56	-.01	.02	.31
・大胆な	.56	-.11	.16	.35	.65	.02	.12	.44	.52	-.03	-.11	.28
・指導力のある	.48	.42	.03	.41	.64	.14	-.07	.43	.69	.41	-.07	.65
・頼りがいのある	.43	.21	-.13	.25	.74	-.09	-.08	.56	.69	.36	-.19	.64
・決断力のある	.64	.30	-.03	.50	.77	.13	-.01	.61	.49	.09	.05	.25
・たくましい	.55	.10	-.06	.32	.51	-.10	-.09	.28	.53	.05	-.30	.37
・自己主張できる	.58	.18	.10	.38	.59	-.03	.06	.35	.54	-.03	.14	.31
・信念を持った	.58	.07	.01	.34	.54	.12	-.18	.34	.48	.08	.11	.25
・忍耐強い	.60	.31	.05	.46	.47	.15	.22	.29	.34	.32	.02	.22
・人の立場に立って考えられる	.19	.60	.09	.40	.14	.71	.03	.52	.10	.82	.11	.69
・思いやりのある	.24	.73	.02	.59	.11	.74	.01	.56	-.01	.55	-.01	.30
・人の気持ちのわかる	.05	.68	.10	.47	.08	.79	-.06	.63	.07	.75	.14	.59
・誠実な	.27	.61	.17	.47	.19	.49	.06	.28	.12	.08	.15	.04
・暖かい	.26	.32	.03	.17	.13	.44	.17	.24	.11	.27	.23	.14
・よく気のつく	.13	.45	.46	.43	-.09	.59	.36	.49	.11	.41	.33	.29
・献身的な	.14	.46	.36	.36	-.03	.46	.29	.30	.09	.12	.03	.02
・細やかな	-.05	.10	.61	.38	.06	.15	.11	.04	-.03	.18	.82	.71
・繊細な	-.04	-.02	.70	.49	-.07	.16	.29	.11	.01	.00	.73	.53
・言葉遣いのいいいな	.10	.17	.48	.27	.05	.08	.19	.05	.03	.13	.35	.14
・おしゃれな	.19	.31	.24	.19	.19	.05	.69	.51	-.06	-.03	.13	.02
・色気のある	-.10	.03	.16	.04	-.13	-.04	.65	.44	-.06	.09	.11	.02
・かわいい	-.10	.11	.22	.07	-.15	.26	.54	.38	-.21	.20	.25	.15
分散(%)	4.07 (16.96)	2.98 (12.42)	1.68 (7.00)	8.73 (36.38)	4.70 (19.58)	2.94 (12.25)	1.72 (7.17)	9.36 (39.00)	3.85 (16.04)	2.32 (9.67)	1.83 (7.63)	8.00 (33.33)

次元を持つのは、男性役割期待が3因子(分散は出現因子の順に, 11.47, 4.08, 4.06), 女性役割期待が4因子(同, 10.24, 5.82, 4.06, 3.53), 個人的評価では2因子(同, 7.51, 6.33)であった。3概念とも第I, 第II因子の項目内容はほぼ共通しており, 男性役割期待第III因子と女性役割期待第IV因子もほぼ同内容で, 女性役割期待第III因子だけが他の概念にはみられない因子だった。因子の解釈は負荷量.35以上の項目を基に行った。

第I因子は後述2の分析で得られたTABLE 1に示す第I因子の項目およびその反対語に高い負荷を示す項目から成り, 従来言われている男性性に相当する。その内容はあくまで個人を軸にした持てる力の主張であり, Parsonsらの言う道具的特性を表わし, 課題志向的, 達成的なものである。Bakanは作動性を個人としての人間に関係するもので, 自己維持, 自己主張, 自己拡大の中に見出されると言うが, その意味でこれらの特性を, 男性性と言うよりは人間の基本的存在様式のひとつである作動性と名付けた方がより適切と思われる。

第II因子は同じくTABLE 1に示す第II因子の項目お

よびその反対語に高い負荷を示す項目から成り, 基本的にはParsonsらの言う表出的特性を表わしてはいるが, 従来の女性性と言うには必ずしも適当でない。その内容はより広い次元での他者との関係を表わす。すなわち, 親和的ではあるが依存的でない, 自己確立の上での他者理解, 他者への配慮である。Bakanは個人が他者とともに存在するその存在感の中に示される基本様式を共同性と名付けたが, その意味でこの第II因子を共同性の因子と命名するのが適切と思われる。

男性役割期待第III因子, 女性役割期待第IV因子は否定的特性のみから成る特異な因子で\*, 第I因子の作動性, 第II因子の共同性に意味的に対置している。すなわち, 自己中心的, 利己的, 傲慢という共同性の欠如と, 強引, 強情, 乱暴という力(=作動性)の過剰を表わす項目から成り, いわゆる人間性の未熟さとしての自己中心性と命名できる。この因子はSpenceら(1979)の否定的特性を含むEPAQにおける, 共同性によって和らげられ

\* 2の分析では除かれているのでTABLE 1に示されていない。

ない作動性としての M<sup>-</sup> スケール (利己的な, 傲慢な, 自己本位の, 等) に相当するが, いずれにせよ両性にとって忌避されるべき特性を表わしている。

女性役割期待第Ⅲ因子は他の評価概念にはみられない女性役割次元に固有のもので, 色気のある, おしゃれな, かわいい, 愛嬌のある, およびその反対語から成る。この因子は従来言われている女性性の外面的特性を表わしており, 性的魅力と名付けられた。

次に, 37対74特性から成る双極尺度の調査結果を, 単極尺度の場合と同様に主因子解, バリマックス回転により各評価概念ごとに因子分析した。その結果, 各概念とも3因子から成るほぼ同一の因子構造を持ち, 因子の出現順序のみが概念により異なっていた。因子構造は単極尺度の場合とほぼ同様で, 共同性 (男性役割期待第Ⅰ, 女性役割期待第Ⅱ, 個人的評価第Ⅰ因子, 分散は順に, 3.77, 4.06, 5.19) と作動性 (男性役割期待第Ⅲ, 女性役割期待第Ⅰ,

個人的評価第Ⅱ因子, 分散は, 2.46, 6.60, 4.30) が主要な次元を占めている。一方, 単極尺度で女性役割期待からのみ抽出された性的魅力次元が, 双極尺度ではその因子内容を広げ, 他の2概念からも抽出された (男性役割期待第Ⅱ, 女性役割期待第Ⅲ, 個人的評価第Ⅲ因子, 分散は順に, 2.90, 3.00, 2.49)。すなわち, 女性性の外面的特性である美 (性的魅力) と, 表出的特性である繊細さから成る美・繊細さと名付けられる因子である。各因子に高い負荷を示す代表的な項目は後述2の分析で得られた TABLE 2 に示されている。他方, 単極尺度で抽出された自己中心性は, 一部が共同性および美・繊細次元の対極に位置づく形で吸収され抜け落ちた。

以上のように単極尺度, 双極尺度とも, 男女であると, また個人の価値観と一般の期待の認知であるとかかわらず, 作動性と共同性が性役割の主要な次元であることが明らかにされた。一方, 両次元はリーダーシップの主

TABLE 2 双極尺度による男性役割期待, 女性役割期待, 個人的評価の因子分析結果

項目	男性役割期待				女性役割期待				個人的評価			
	第Ⅰ因子 共同性	第Ⅱ因子 作動性	第Ⅲ因子 美・繊細	共通性 (h <sup>2</sup> )	第Ⅰ因子 作動性	第Ⅱ因子 共同性	第Ⅲ因子 美・繊細	共通性 (h <sup>2</sup> )	第Ⅰ因子 共同性	第Ⅱ因子 作動性	第Ⅲ因子 美・繊細	共通性 (h <sup>2</sup> )
・人の立場に立—自己中心的な って考えられる	.73	.14	.25	.62	.19	.73	.07	.57	.79	.10	.15	.66
・思いやりのあ—思いやりのな い	.65	.20	.08	.47	.28	.51	.14	.36	.65	.31	.22	.57
・人の気持のわ—人の気持のわ かる からない	.59	.14	.17	.40	.31	.61	.15	.49	.63	.19	.24	.49
・誠実な—不誠実な	.44	.25	.12	.27	.07	.67	.21	.50	.58	.20	.12	.39
・暖かい—冷たい	.64	.14	.06	.43	.13	.61	.17	.42	.62	.15	.16	.43
・よく気をつく—気がきかない	.29	.09	.45	.29	.07	.41	.50	.42	.50	.01	.41	.42
・献身的な—利己的な	.42	.06	.39	.33	-.03	.36	.46	.34	.57	-.01	.32	.43
・行動力のある—行動力のない	.11	.59	-.04	.36	.83	.16	.04	.72	.06	.57	-.04	.33
・積極的な—消極的な	.13	.73	.15	.57	.69	.06	-.11	.49	.17	.61	.13	.42
・意志の強い—意志の弱い	.21	.40	-.07	.21	.82	.20	-.02	.71	.15	.37	-.04	.16
・大胆な—臆病な	.08	.49	-.33	.36	.71	-.04	-.08	.51	.08	.60	.01	.37
・指導力のある—指導力のない	.20	.57	.08	.37	.57	.18	-.05	.36	.33	.57	.00	.43
・頼りがいのあ—頼りがいのな い	.29	.23	.10	.15	.57	.08	.00	.33	.27	.51	.08	.34
・決断力のある—決断力のない	.10	.14	-.03	.03	.60	.14	.01	.38	.18	.32	-.08	.14
・たくましい—ひ弱な	.27	.33	-.24	.24	.57	-.04	-.25	.39	-.07	.55	-.22	.36
・自己主張でき—自己主張でき ない	.10	.24	.06	.07	.66	.16	-.07	.47	.21	.29	.08	.13
・信念を持った—信念のない	.13	.26	-.01	.08	.58	.29	.03	.42	.22	.30	-.02	.14
・忍耐強い—忍耐強くない	.32	.36	.02	.23	.47	.35	.03	.34	.35	.34	-.04	.24
・細やかな—がさつな	.07	-.08	.64	.42	-.11	.16	.81	.69	.28	-.17	.60	.47
・繊細な—荒々しい	.22	-.02	.48	.28	-.12	.14	.62	.07	.27	-.29	.63	.55
・言葉遣いので—言葉遣いの悪 い ない	.10	.07	.75	.58	-.12	.10	.60	.38	.38	.11	.43	.34
・おしゃれな—やばな	.04	-.02	.41	.17	.12	.02	.29	.10	.12	.19	.68	.51
・色気のある—色気のない	-.02	.02	.19	.04	-.13	.05	.19	.06	.06	.13	.65	.44
・かわいい—かわいくない	.14	.04	.02	.02	-.21	.25	.25	.17	.17	-.07	.65	.46
分散 (%)	2.67 (11.13)	2.23 (9.29)	2.09 (8.71)	6.99 (29.13)	5.02 (20.92)	2.77 (11.54)	2.26 (11.08)	10.05 (41.88)	3.58 (14.92)	2.86 (11.92)	2.78 (11.58)	9.22 (38.42)

要な次元である「体制づくり」と「配慮」(Halpin & Winer, 1957),あるいはリーダーシップ・タイプとしてのP型とM型(三隅, 1966)によく対応する。その意味で両次元は、期待の程度に差はあっても、男女にかかわりなく人間一般に期待される基本的特性と言えよう。そして、美・繊細さは女性役割次元にのみ強く関わる特性と言える。

## 2. 尺度項目の選定

先の因子分析結果に基づいて、単極尺度、双極尺度に共通する尺度項目を下記の基準により選出した。なお尺度作成に際しては、概念の斉一性を保つため、肯定的特性およびその対語のみを選択の対象とした。

両尺度の全ての評価概念から作動性と共同性が、また単極尺度の女性役割期待から性的魅力が、双極尺度の3評価概念から性的魅力を含む美・繊細さが抽出された。そこでこの3次元を性役割を構成する基本次元とみなし、下位尺度を構成する項目を次の基準で選出した。①作動性：6概念(2尺度×3評価概念)中少なくとも4概念で.35以上の因子負荷量を持つ項目。②共同性：作動性と同様の基準だが、「献身的な」のみは基準を.30以上に緩めて採用した(この場合、5概念で基準に合致)。なお、「責任感のある」と「心の広い」は本基準に合致する項目だが、作動性にも同程度に負荷しているので独立性の点からこれを除いた。③美・繊細さ：4概念(単極尺度の女性役割期待、双極尺度の3評価概念)中少なくとも2概念で.35以上の因子負荷量を持つ項目。ただし「献身的な」と「よく気をつく」は本基準にも合致する項目だが、共同性への負荷がより高く、ともに「他者に対する態度」を表わしているので共同性に組入れた。以上の基準で作動性11、共同性7、美・繊細さ6の計24項目を選定し、性役割測定尺度(Ito Sex Role Scale; ISRS)とした。

次に、これらの基準で選定した尺度項目が各概念で独立な斉合性のある意味次元を成しているか否かを確認した。方法として、元の調査資料より24項目を抜き出し、1と同様の手続で因子分析(主因子解、バリマックス回転)を行った。因子の解釈は負荷量.40以上の項目を基準にした。その結果、単極尺度ではTABLE 1にみるように作動性、共同性とも因子の独立性がよく保たれ、下位尺度を構成する各項目とも同因子に高く負荷していた。しかし、美・繊細さのみは評価概念により美(性的魅力)と繊細さに分れた。双極尺度ではTABLE 2にみるように単極尺度ほどには因子の斉合性が保たれていない。特に共同性の「よく気をつく—気がきかない」「献身的な—利己的な」は、評価概念により共同性あるいは美・繊細さに負荷している。また作動性の項目が、特に男性役割期待では必ずしも同因子に高く負荷していない。美・

繊細さでは、特に繊細さのみが同因子に負荷しているが、個人的評価では単次元として高い負荷量を持つ独立な因子として抽出された。

以上より、本尺度項目が各概念で独立な斉合性のある意味次元を成していることが確認されたが、対語のある双極尺度より単極尺度の方が因子の斉合性が高いことから、性役割測定には単極尺度がより適切だと言える。なお、美・繊細さは必ずしも単一な次元とは言い難いが、双極尺度の個人的評価でその一次元性が確認されていることから、これを単一尺度として取り扱う。

## 3. 下位尺度間の関係

下位尺度間の関連性を検討するにあたり、ここでは因子得点ではなく、上記の方法で同定された各次元を代表する下位尺度項目の単純加算値(尺度得点)を用いた。評価概念が複数なため、因子得点では概念により負荷する項目の重みづけ係数に変動があり、尺度の意味内容が異なってしまう。そのため各概念に共通して安定した尺度値を得るには尺度得点の方が有効と考えたからである。

TABLE 3はその相関関係を示したものである。これによると作動性と共同性にはかなり相関がみられる。本尺度と項目内容が比較的共通しているSpenceらの尺度、および若林らの「力強さ」と「親しみやすさ」でも正の有意な相関がみられているが(前者で $r=.14\sim.47$ , 後者で $r=.31\sim.52$ )、Bemの尺度においては両者は比較的独立である( $r=-.14\sim.11$ )。この違いは尺度作成上の不備というより、男性性、女性性の定義の仕方に由来すると考えられる。尺度作成に際し、いずれも男性あるいは女性に典型的という基準で、性差のみられた項目が選択されたが、Spenceらの尺度では、その前に「両性にとって望ましい」と判断されたものから項目がとられており、他方、Bemの尺度では必ずしも社会的に望ましいとは言えない項目が女性性尺度に含まれている(子どもっぽい、だまされやすい、内気な、従順な)。このように両性にとっての望ましさを前提に男性性、女性性を定義するか、現にある状態で捉えるかによって尺度内容が異なり、そ

TABLE 3 下位尺度間の相関

下位尺度		評価概念		
		男性役割期待	女性役割期待	個人的評価
単極尺度	作動性×共同性	.47***	.19**	.32***
	共同性×美・繊細	.35***	.38***	.47***
	作動性×美・繊細	.03	.02	-.08
双極尺度	作動性×共同性	.46***	.32***	.45***
	共同性×美・繊細	.41***	.42**	.53***
	作動性×美・繊細	.03	-.16*	.05

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

の結果、両者の意味上の関係も異なってくる。

次に他の下位尺度間の関係をみると、作動性と美・繊細さの相関はほぼゼロであり、若林らの「力強さ」と「細やかさ」でも、同様の結果が得られている。なお、共同性と美・繊細さにはかなり高い相関がみられるが、両者は元々、女性役割次元である表出的特性を基礎にしているためと考えられる。

以上の結果から、これまで女性性として扱われてきた内容には共同性と美・繊細さの2つの次元が含まれており、伝統的な狭義の女性性である美・繊細さは男性性である作動性と独立な関係にあるが、作動性と共同性は両性にとっての望ましきという点で互いに関連を持つ。このように共同性は伝統的な男性性と女性性をつなぐ共通項、媒介項であり、Humanity (伊藤, 1978) により近いと言える。

4. 信頼性, 妥当性の検討

1) 信頼性 尺度の信頼性は TABLE 4 に示す Cronback の  $\alpha$  係数によった。作動性は.80~.89, 共同性も.80~.85と高い値にあり、美・繊細さもこれよりやや落ちるが.63~.80と満足すべき値にある。いずれの尺度も内の一貫性は良好な水準にあることを示している。

2) 併存的妥当性 妥当性についてはまず併存的妥当性が検討された。双極尺度による調査に回答した217名に対し、性役割観測定尺度MHFスケールを実施した(有効回答数189名)。TABLE 5 は個人的評価における両尺度の相関係数を示したものである。作動性はM, Hと、共同性はM, H, Fと、美・繊細さはH, Fと有意な正の相関があり、なかでも作動性とM, 共同性とH, 美・繊細さとFにはかなり高い相関がある。他方、作動性とF, 美・繊細さとMの相関はゼロかかなり弱い。このこ

TABLE 4 信頼性係数 ( $\alpha$  係数)

下位尺度		評価概念		
		男性役割期待	女性役割期待	個人的評価
単極尺度	作動性	.85	.88	.84
	共同性	.80	.82	.82
	美・繊細	.63	.69	.72
双極尺度	作動性	.80	.89	.87
	共同性	.83	.81	.85
	美・繊細	.70	.78	.80

TABLE 5 ISRS と MHF の相関 (N=189)

MHF	ISRS		
	作動性	共同性	美・繊細
Masculinity	.55***	.28***	-.03
Humanity	.46***	.58***	.25***
Femininity	.11	.33***	.44***

\*\*\*  $p < .001$

とから本尺度はMHFスケールと構造的にかなり共通した内容を持つ尺度と言える。

3) 下位尺度の内容および解釈の妥当性 これまで下位尺度の項目にみられる内容から、作動性を従来の男性性と、美・繊細さを従来言われている狭義の女性性と対応づけ、さらに共同性を女性性を基礎にしながらその枠を越えたヒューマンな特性と解釈してきたが、果たしてその解釈が妥当であるかを検討した。先の予備的調査(伊藤, 1983)から、各項目のステレオタイプな性の帰属が明らかにされているが、作動性は全て男性語に、美・繊細さも全て女性語に分類された項目から成る。一方、共同性は男女どちらに属すとも言えないあいまい語と、一部女性語から成っている。また、本調査で得られた項目の評定平均と S.D. から、男性役割期待と女性役割期待の差異を項目ごとに  $t$  検定 (対応のある  $t$  検定) したところ、単極尺度、双極尺度とも共同性の「誠実な」(5%水準)を除く全ての項目に0.1%水準で有意な差がみられ、作動性は男性に、美・繊細さは女性に、共同性もその差は少ないが女性により多く期待される特性であった。以上より、下位尺度およびそれを構成する項目内容とその解釈の妥当性が確認された。

5. 性役割期待の認知および性役割観

最後に、本調査の対象者である大学生の性役割期待の認知と性役割観を検討した。下位尺度の評定値は尺度項目の値を合計して項目数で割ったものを用いた。単極尺度、双極尺度とも評定のパターンは全く同じであったので、単極尺度の結果を中心に分析を行った。FIG. 1 はその結果を図示したものである。

男性役割期待の認知に性差はほとんどみられず、男女とも男性には作動性が高く期待され、次いで共同性も男性に欠かせない要素だと認知している。男性に対する美・繊細さへの期待は認知されておらず、女子にその傾向が強い ( $t=2.71, p < .01, df=153$  以下略)。

女性役割期待では男女とも共同性が女性には高く期待

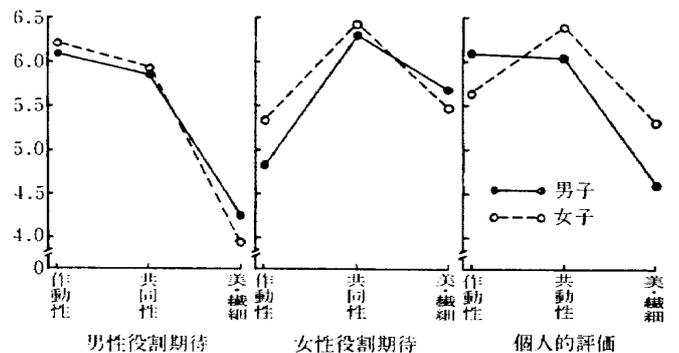


FIG. 1 3つの評価概念における下位尺度の平均値 (単極尺度)

されていると認知している。一方、伝統的に女性特性とされる美・繊細さへの期待の認知はさほど高くなく、特に女子にその傾向が強い ( $t=2.13, p<.01$ )。他方、作動性は女性にあまり高く期待されていないと認知し、特に男子にその傾向が強い ( $t=4.43, p<.001$ )。女子は女性には作動性が美・繊細さと同程度に期待されていると認知するのに対し、男子はよりステレオタイプな期待を認知している。

個人的評価では全ての次元で性差がみられた(作動性  $t=4.73$ , 共同性  $t=3.30$ , 美・繊細さ  $t=6.61$ , いずれも  $p<.001$ )。男子は作動性と共同性が自己にとって同程度に重要な要素だと考え、美・繊細さはほとんど考慮されていない。一方、女子は共同性が自己にとって最も重要だと考え、作動性、次いで美・繊細さがそれに次ぐ価値ある特性だと考えている。男女とも、パターンとして性役割観が性役割期待の認知にほぼ一致しているが、ともに、男性役割である作動性(女子)と美・繊細さ(男子)で両者に大きなズレがみられた。

以上のような性役割期待と性役割観より、男性の性役割は作動性と共同性の二次元より成り、女性のそれはこれに美・繊細さを加えた三次元より成る構造を有していると言える。

#### 引用文献

- Bakan, D. 1966 *The duality of human existence*. Cicago, Rand McNally.
- Bem, S.L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- Gaudreau, P. 1977 Factor analysis of the Bem Sex-Role Inventory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 45, 299-302.
- Gross, R., Batlis, N., Small, A., & Erdwins, C. 1979 Factor structure of the Bem Sex-Role Inventory and the Personal Attributes Questionnaire. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47, 1122-1124.
- 伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, 26, 1-11.
- 伊藤裕子 1983 性役割特性語の研究—肯定および否定的特性語の収集, 分類および性の帰属 PL学園女子短期大学紀要, 10, 32-45.
- 伊藤裕子 1985 性役割特性語の研究II—否定的特性を中心にした因子構造の検討 PL学園女子短期大学紀要, 12, 16-29.
- Kelly, J.A., & Worell, J. 1977 New formulation of sex roles and androgyny: A critical review. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 45, 1101-1115.
- 三隅二不二 1966 新しいリーダーシップ—集団指導の行動科学 ダイヤモンド社
- Parsons, T., & Bales, R.F. 1955 *Family socialization and interation process*. Glencoe, Ill., Free Press.
- Spence, J.T., Helmreich, R., & Stapp, J. 1975 Ratings of self and peers on sex role attributes and their relation to self-esteem and conceptions of masculinity and femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 29-39.
- Spence, J. T., Helmreich, R.L., & Holahan, C.K. 1979 Negative and positive components of psychological masculinity and femininity and their relationships of self-reports of neurotic and acting out behaviors, *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1673-1682.
- 若林満・鹿内啓子・後藤宗理 1981 女性の社会的役割態度と職業自己イメージ—尺度の構成と比較分析 名古屋大学教育学部紀要, 28, 71-98.

(1985年10月25日受稿)